



統計から社会の実情を読み取る

第143回 生涯未婚率の地域マップ

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。(財)国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、「社会実情データ図録」サイト (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>) を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著書に、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)、『なぜ、男子は突然、草食化したのか:統計データが解き明かす日本の変化』(同上、2019年)等。PRESIDENT Online にて連載を執筆中。



男性では東高西低、女性では西日本・大都市で高い生涯未婚率パターン

日本人の結婚観の変貌、独身志向の高まりによって、生涯未婚率が急上昇していることが2020年の国勢調査の結果明らかとなり、将来は男性の3割近く、女性の2割近くが結婚しない社会となる予想もある点については、昨年4月号の「『皆婚慣習』が消えていく兆候」と題した記事で紹介した。今回は、その際は紙面の関係で取り上げなかった生涯未婚率の地域別の特徴についてふれよう。

生涯未婚率という統計指標は、50歳時の未婚率(実際は45～49歳の未婚率と50～54歳の未婚率の平均から算出される)のことを言い、その後に結婚する人は少ないことから、「生涯未婚率」と称されている。

なお、本稿の指標値は、時系列分析のため、最近使われるようになった不詳補完値ではなく配偶関係未詳を除く人口に占める未婚者の割合を使用している点を付記しておく。

ここでの生涯未婚率は、死亡者数に占める未

婚者の割合ではない点に注意が必要である。上の記事ではふれなかったが、2020年の国勢調査による生涯未婚率は男性が25.7%、女性が16.4%であるのに対して、2020年の人口動態統計による15歳以上の死亡者数に占める未婚者の割合は、男性11.1%、女性6.7%となっている。前者が現在の40～50代の状況を示しているのに対して、死亡数が多い80～90代の男女は皆婚慣習が成立していた時代の人々であるので後者の未婚割合が低く出るのは当然なのである。

図1には、どの地域で生涯未婚率が高くなっているのか、すなわち一生独身の者が多いかを知るため、都道府県別の生涯未婚率の分布マップを作成した。

男性と女性では分布パターンがかなり異なっており、生涯未婚率の上昇といっても男女では条件がかなり異なっていることをうかがわせている。

男性の方の生涯未婚率の分布の特徴は以下である。

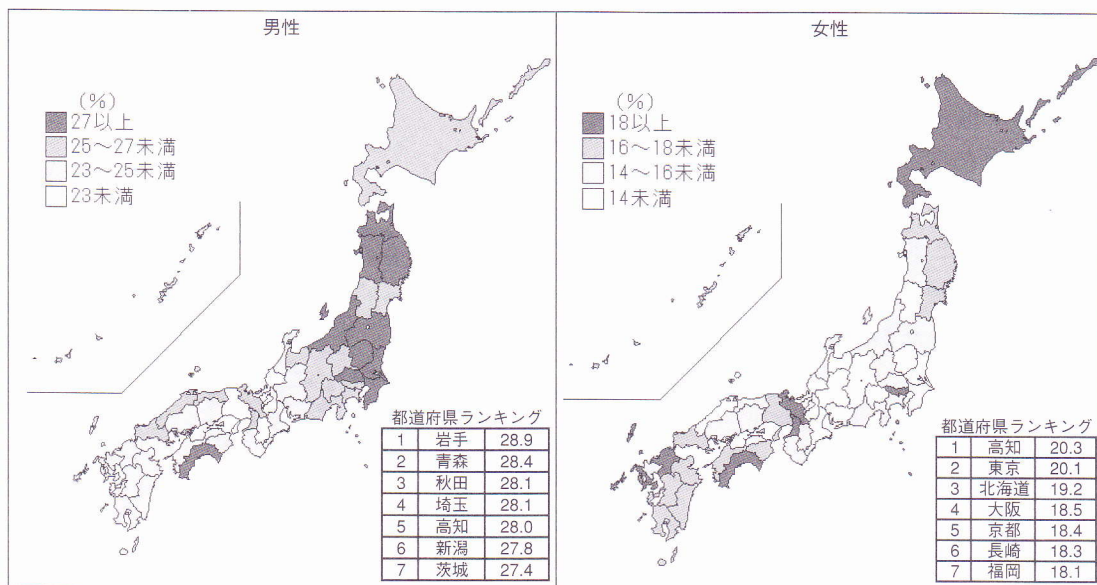


図1 生涯未婚率マップ (2020年)

注) 配偶関係未詳を除く人口に占める未婚者の割合。生涯未婚率は45～49歳と50～54歳の未婚率の平均。
資料) 総務省統計局「国勢調査」

- ① 大きく見れば、東日本で高く、西日本で低い傾向が認められる。トップは岩手の28.9%、2位は青森の28.4%である。東北の男性は西日本と比べて内向的と言われるが、それが影響しているのであろうか。
- ② 西日本の中でも高知や山陰などでは高くなっている。
- ③ 近畿の中心部（大阪、京都）を取り巻くベッドタウン地域で最も低くなっている。

女性の生涯未婚率の分布の特徴は以下である。

- ① 男性とは逆にどちらかというと東日本より西日本の生涯未婚率の方が高い傾向が認められる。最も高いのは高知の20.3%である。
- ② ただし、東日本の端に位置する北海道では、

開拓時代に男女の区別なく働いた伝統から女性の独立性が強いためか、女性の生涯未婚率が3位と高くなっている（ちなみに女性の喫煙率も北海道が全国トップ）。

- ③ 男性とは異なり、大都市圏中心部の東京、大阪、京都、福岡などで特に生涯未婚率が高い。大都会の居住環境や就業環境は、女性が一生独身で暮らすのに適しているとも言えよう。

- ④ 日本列島の中央に位置する中部地方では生涯未婚率が低くなっている。例えば、愛知は3大都市圏の1つであるにもかかわらず、生涯未婚率13.4%と東京の20.1%、大阪の18.5%と比較してかなり低くなっている。やはり、結婚するのが当然という意識が強いせいだろう。

この20年で全国が東京化、また女性の生き方の地域色が増す

こうした地域分布は、生涯未婚率がまだ低かった時代と比較してどう変化しているのであろうか。この点を見るため、図2では、2000年と2020年の都道府県データをX軸に男性、Y軸に女性の値をとった2つの散布図で比較した。

図2からは、以下のような変化の特徴を読み取ることができる。

① まだ生涯未婚が一般的でなかった2000年には男女とも1位が東京、2位が沖縄であり、この2都県が群を抜いていた。ところが2020年には東京、沖縄は特殊でなく、他の都道府県の1つに過ぎない位置となった。東京や沖縄という特殊な地域の特徴だった高い生涯未婚率が、それから20年経過する中で、それぞれの地域特色を帯びながら日本列島全体に広がったと言えよう。全国が東京化したと言い換えることができるかもしれない。

② 2000年の段階では、東京と沖縄を除く地域分布を見ると男女のばらつきに差はあまりなかった。ところが、2020年には縦長のばらつきパターンに変化した。すなわち男性のばらつきはあまり変わらない中

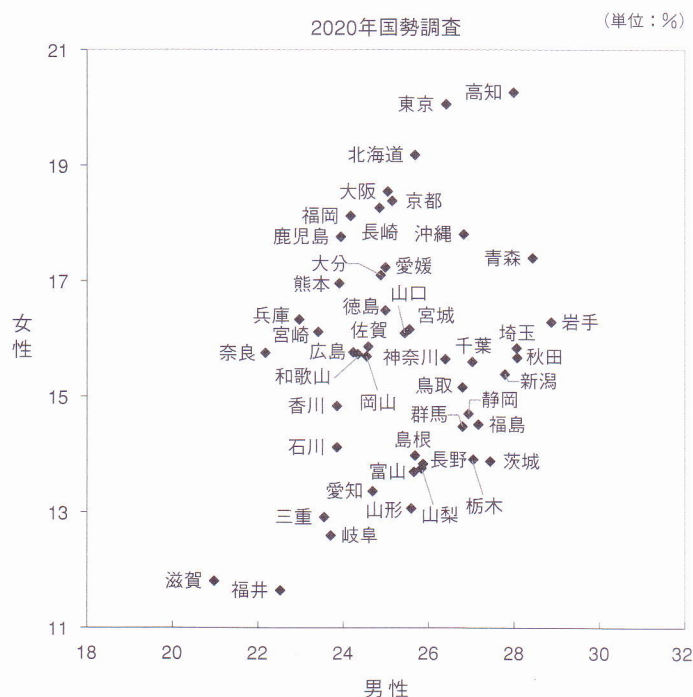


図2 都道府県別の生涯未婚率の変化(2000～20年)

注) 配偶関係未詳を除く人口に占める未婚者の割合。生涯未婚率は45～49歳と50～54歳の未婚率の平均。両図ともX軸、Y軸の幅(レンジ)は同じ。

資料) 総務省統計局「国勢調査」

で女性のばらつきが広がっている。大都市で生涯未婚率が高く、ただし愛知は例外である点に変化はないが、一方で、高知、北海道といった地域における女性の生涯未婚率の高さ、また、滋賀、福井といった地域における低さがかつてより目立つようになった。結婚するかどうかといった女性の生き方に地域の経済や文化が影響する程度が増したように思われる。

さらに別の角度から2000年から2020年にかけての状況変化を見るため、図3に生涯未婚率の都道府県ランキングの順位変化について、「男女とも順位上昇」、「男だけ順位上昇」、「女だけ順位上昇」、「男女とも順位上昇せず」の4区分で図示した。「順位上昇せず」には「順位が不変」を含んでいる。

この図を見れば、基本的に東日本で生涯未婚率の順位が上昇する傾向になっていることが分かる。男性については、ますます東日本の生涯未婚率の高さが目立つようになってきたということであるし、女性については、生涯未婚率の西日本優位がやや崩れつつあるということを意味している。

ただし、東日本といっても、北陸のうちの福井、関東のうちの東京、神奈川、群馬、そして山梨、静岡以西の太平洋側地域では男女とも順位が上昇しておらず、また、東北の山形、福島、中部の長野、岐阜といった内陸ラインの地域では順位上昇は男性だけとなっており、東日本の中でも濃淡が大きい点には留意が必要である。

また、女性のみ順位上昇している地域は、東

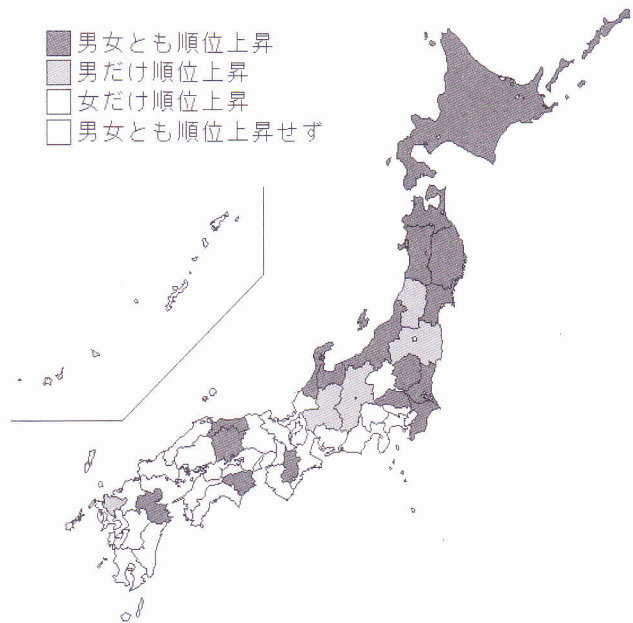


図3 生涯未婚率ランキングの順位変化（2000～20年）

資料）総務省統計局「国勢調査」

日本には存在せず、西日本の京都、大阪、島根、広島、高知、鹿児島でそうした変化が起きている点が目立っている。

こうした東日本と西日本の変化パターンの違いは、出生率が概して西日本優位となっていることと関連すると思われる。2016年3月号で分析した「出生率：強まる西高東低の地域構造」は、データの的には2020年に向け、さらに強まっていることが確認されている。

なお、結婚相手をめぐる争奪戦が存在するとすれば、女性のみ順位が上昇した地域では男性にとって以前と比べ不利になり、男性のみ順位が上昇した地域では女性にとって以前と比べ不利になっていると考えられよう。